〔基 調 講 演〕

日 本 の 医 療 と 国 際 化

——クリティカルパスからの病院感染対策まで——

小 林 寛 伊 (関東逓信病院)

世界の交流は、国内交流と変らない位になり、ヨーロッパにおけるユーロの誕生さえ実現した。このうちで、日本の医療環境は目まぐるしく変化している。人口減少、少子多老化社会、医療制度改革、医師数増加、看護婦数増加、大学卒看護婦の増加、医療費削減、病床数低減などの背景のもとに、高度先進医療を目指す急速な医科器械の進歩開発による最新医科器械導入の必要性和在来型機器との調和が課題となっている。

医療費の膨張は、世界的問題で、その面での先進国英米の医療制度をいかに日本独自の形に翻訳して導入し、真に患者のためになる、しかも日本の文化に適した形で作り上げていくことが行政的課題である。そのような観点から、今後の日本の医療、および、国際化の液の中で揺れ動く医療について言及し、話題を提起させていただくことで、永井 勲大会長の採択されたテーマ“国際標準化を見据えた医科器械の開発”の基調講演としたい。つまり、これからの日本が目指す医療に立脚して、しかも、国際化も踏まえて、医科器械が開発されていくことが、今回の大会のテーマと考えるものである。

日本の医療は、急性期病床と慢性期病床との種分け、在宅医療の推進、緩和ケアの拡充、老人医療対策、病診連携の推進などの動きの中で、医療機関の機能評価が積極的におこなわれる時代となり、病院感染対策の内容および病院感染率の評価、滅菌・消毒業務の評価（国際的水準との比較）、なども評価の対象となってきた。病院感染制御に関する国際交流、保健関連製品滅菌に関する国際標準化（ISO）も慌ただしい動きをしている。医療機器国際交流が激化してくれば、当然、国際基準の必要性が生まれてくる。

医療法の改正は、日本版 DRG/PPS 導入、薬価差益の消失などが予定されており、それに伴って、入院期間の短縮、クリチカルパス法の導入等が課題となっている。そういう中で、患者中心の患者のための良質な医療が遂行されていかななくてはならず、インフォームドコンセントはもとより、患者本人への病状説明、診療録およびレセプト開示、診療録の医療職共有化、などと激流のごとき変化をみせる時代となっている。

21世紀へ向けてのこのような日本の医療環境の急激な変化を踏まえて、しかも、国際的動向と均衡を採りつつ、患者に役立つ、患者を配慮した、そして現場の医療従事者にとっても安全かつ使い易い、さらにまた、医療経済をも配慮した医科器械を開発していくことが本学会の使命と考える。